

## “雑談” くの一分析

田中 将典

“くの一”とは、云うまでもなく“女”という字の分解である。昔、「明日という字は明るい日と書くのね」という一節のある歌が流行った頃、盛んに漢字のダジャレ遊びをしたことがある。くだらない下ネタが多かったが、ある時技術連盟で紙面フォーラムを発刊することになり、私にも「何でもいいから出せ」との御下命。日頃から高尚な話とは縁のない筆者。遊びの延長上で見つけた「くの一分析(漢字に強くなる本)」なるものを紹介したところ、これが意外にも好評だったので、今回多少加筆修正し、幹事さんの脅迫的投稿依頼に屈することにしたい。

折角、先日のOB会「現場見学部会」にて国土の現場や被災地を視察したのだからもう少し考察し格調高い話題を希望される方は看過願いたい。

「女」という字は左右の手を重ねてしなを作り、跪いている女性の様をかたどったとの事。その女を部首にした漢字には「女子」(若い女の美しさ、このましさ)、「娃」(あい・目元が美しい)「嬌」(きょう・なまめかしい)、「娟」(けん・うつくしい)、「嫫」(しゃく・うるわしい)など、さすが女性の美しさを原義として作られた文字が多い。が、そうでない漢字も少なくなく、誰が考えたのかその字源の謎を解くこじつけがあるので低俗を嫌う方や女性のお叱りを覚悟で紹介する。女として最も良い時が「娘」時代、「昏」(たそがれ)ないうちに「結」ばれ挙げるのが結「婚」式、新郎に抱かれて寝「台」に横たわると「始」まる。夫に身を「任」せて身を震わせると「妊娠」し、亭主の「鼻」につくようになると「嬢」(かかあ)となる。息子が女の「方」を向くと勉強の「妨」げになると教育ママ、夫の浮気を嗅ぎ出しては「石」のようになって「妬」き、相手の女が「疾」(にくい)とヒステリックに「嫉」(ねたむ)。着飾ってクラス会等に行けば「女三人」寄って「姦」(かしましい)。負けずに頑張りなさいとけしかけられると、柳「眉」を描いて「媚」(こび)てみる。若い「男」に挟まれて、いい気分になっていると「鬻」(なぶ)られる。そろそろ我が「家」でも「嫁」を「取」って孫の顔でも見たいと息子に「娶」(めと)らせる。女も長い間やっていると「古」くなり「姑」と言われて煙たがられる。肌も「波」打って来て「婆」となり、頭に「霜」をいだいて「孀」(やもめ)、「老」いて「姥」となる。

とまあ実に変幻自在の態ではないか？近年の変化の時代にあって、何かと女性のバイタリティーが目立つのもむべなる哉である。

それにつけても勇「姿」、「女子」男子など「恰」好は良いが何のことはない「女」「子」どもに支えられての繕い、「マ」(間)抜け、「子」(こ)抜けが「男」とはこれ如何に？

失礼いたしました。お後がよろしいようで。\_